
僕とリンゴと女の子

大森滝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とリングと女の子

【Nコード】

N5635V

【作者名】

大森滝

【あらすじ】

さつき登録したので、テスト投稿なのであらすじはなし。

特になし（前書き）

さっきなんとなく登録してみました。

休憩程度に簡単に内容考えて一時間前に書いてみました。

スラッと一度しか読んでないので。誤字や曖昧な表現あると思います。

まあ、暇つぶし程度なのでてけとう、ではないけど。のほほんと書くつもり。

短編ポイのを暇な時間にスラッと出していく感じなので。

描写やおかしいところあれば色々いつてくください。

短時間で自分ができる範囲。それでどこがだめなのか？ をよく観察したいので、よろしくおねがいします。

特になし

「何カ月、ここで待ち続ければ、いいの？」

昼なのか、夜なのかもわからない謎の工場の中に、僕はいた。

機械音が鳴り響き、オイルの匂いが漂ってくる。

——って、僕に鼻なんてあったっけ？

腕を動かし、僕は鼻を触ってみる。鼻……というべきなのだろうか。縦長いニンジンが、自分の顔に突き刺さっていることを確認する。

……僕はそもそも、なんで動けるの？ 腕は木の棒、雪でできている体。冬になると子供が作りそうな雪だるま見たいな恰好。

「僕はなんだろう？」

誰も居ないのはわかっている。だが、独り言でも呟かなければ。

精神が崩壊しそうな衝動に襲われていた。

そもそも僕に心なんてあるの、かな？

どうして生まれてきたのかも、思い出せない。

目が覚めたら、工場に居て。理由はわからないけど、僕が肌身離さず所持しているこのリング。誰かに守ってくれ、とだけ言われたのを記憶の中で覚えていた。

「僕は、機械を見ていればいいの？」

同じ行動を繰り返し、何を組み立てているかすらわからない機械に向かって、僕は呟いた。

僕が話しかけたところで、機械は返事をしてくれることはなかった。

……暑い、いつもは涼しいのに。

室内は常時冷房で、僕が溶けないよう温度を保てるよう設定されていた。

「溶けてしまう。温度を下げないと……」

小さな個室、そこから機械の作業工程が見渡されるほどの大きな

窓。そこに僕は居る。

「温度を下げるリモコン……。どこにいったの？ かな」

個室は殺風景で、金属のパイプ椅子、傍に山積みになっているリモコンしかなかった。

「温度管理ができるリモコンしか扱ったことないけど。ほかは何に使うのかな」

リモコンを一つ手に取ると、僕は首を捻った（ひねった）。

他のリモコンを押せば、何か変わるのかもしれない。不意に僕はそう感じ、何を思ったのか。温度管理のリモコンを置き、正方形に丸い青色のボタンの形をした箱を手にとった。

これはどんな風に使うのかな？ 軽く当たっただけで折れそうな腕で、青色のボタンをプッシュした。

「……………」

至って何か起きた様子はない。窓の向こうで稼働している機械も、動きを変えた様子もなかった。

変なボタンだなあ。僕は少しの期待と緊張が消し飛び、再び無気力になった。

「あのおー？ こんにちはっ！」

！？ 急に僕以外の声の主が聞こえ。驚きのあまり、声の方に振り返った。

一〇歳になるかならいかという小柄な子。ショートで少し癖のある髪に赤い眼。よくわからないが、白の長いドレスを着ている。が、そのドレスのサイズが合ってなく、地面にドレスの端が垂れていた。

「……………」

「どうしたの？ こんにちはいったでしょ？ 挨拶、挨拶」

「——こんにちは、あなたは、どうしてここにいるの？」

僕の問いかけが不思議に思ったのか、小さな少女は首を傾げた。

「あなたが呼び出したのよ。大丈夫？ それで何の用なのかなあ？」

少女は微笑みながら、僕の前でピョコッと数回跳ねると、自分の

顔を指差した。

「うちはニルだよ。よろしく」

特になし（後書き）

特になし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5635v/>

僕とリンゴと女の子

2011年10月9日13時37分発行